

ギアナ高地・エンジェルフォール

Guiana high-lands · Angel-falls

古里明瑠

Akaru Furusato

EICA 名誉会員

これほど科学技術が発達し、飛行機での移動が日常化した中で、地球上に未開の地は残っていないと思いがちであるが、そうではないことを実感させてくれるのが、アマゾン河源流域の一つに連なるギアナ高地である。正確には、ブラジルとヴェネズエラの国境地帯で南米第3の大河オリノコ川と流域面積世界第1位のアマゾン河の分水嶺地域であるが、大西洋からの貿易風が北東から吹き付け、ギアナ高地で雨となって降り注ぐため、雨量が多く、赤道直下ということもあって、密林を形成し、他のアマゾン河源流域と同様の未開の地となっている。20年ほど前に、テレビ番組「地球最後の秘境、緑の魔境ギアナ高地」を視て以来、一度は訪れてみたい憧れの地であった。

1. ヴェネズエラ ギアナ高地

2005年2月13日夕方ブラジル・リオデジャネイロからサンパウロ経由空路5時間、ヴェネズエラの首都カラカスに深夜着。現在ヴェネズエラは、政情、経済ともに不安定で入国が厳しく制限されているが、当時間も夜間外出禁止令が出されており、空港からホテルへは、バスで直行であった。

翌朝、カラカス空港から国内航空で、いよいよギアナ高地へ、と意気込んでいたところ、現地が天候不良のため、一旦カリブ海に浮かぶマルガリータ島の空港に予定外の滞留。乾季に当たるとはいえ、1年に366日雨が降ると言われるギアナ高地は飛行条件が難しいのだという。昼前、天候回復。内陸のプエルトオルタス空港に飛び、5人乗りのセスナ機に乗り換え、3時間ほどでギアナ高地到着。

ギアナ高地の中でも、お目当ての世界最長の滝エンジェルフォールのあるこの地域には、テピユイと称される100を超えるテーブルマウンテン群があり、垂直に切り立った島状に屹立して点在していて、特異な風景となっている。

2. エンジェルフォール

この中で、アウヤン・テピユイが最大で、東京23区を超える広さがあり、ここから落ちる滝が、世界最大落差のエンジェルフォール(979m)である。(ち

なみに、日本最長滝は、立山黒部の称名滝350m。有名な那智の滝は133m、華厳の滝は97m)。セスナ機は、979mの滝を上下しながら遊覧飛行。テピユイの上面は比較的平らで、まさにテーブル状になっているが、ごつごつした岩の連なりで、平地はなく、鬱蒼とした森が覆っている。ギアナ高地が海拔500~1,000mほどの高原である上にテピユイは更に1,000m以上屹立しているわけなので(アウヤン・テピユイの標高2,535m)、周囲とは崖で隔絶された環境にあり、動植物にも特異な生態系があるという。屹立した外縁には、エンジェルフォールのほかにも幾つもの滝がかかっている。まさに壮観である。

3. カナイマ

ほどなく、宿泊地カナイマに着陸、ホテルのバスで、チェックイン。ホテル本屋はビル状であるが、宿泊は1家族ごとの草屋根のコテージ。カラオ川のラグーンに面したリゾート地となっているが、開発には厳しい制限があるのだという。まず、驚いたのが、洗面所も風呂も用水が茶色であること。気を付けてみるとラグーンも全体が茶色で、現地ではココ・コーラ色と言うそうで、熱帯雨林に降り積もった落ち葉の堆積層を透過するため、タンニンで川もすべて茶色になっている。人畜には無害とのこと、濁っているわけではないが、いわゆる透視度は30cmほど(無味無臭)。歯磨きには、少々抵抗があったが、飲料水はミネラルウォーターがペットボトルでコテージに常備。暫くして、洗面所から家内の悲鳴があがって、のぞいてみると天井に大きなヤモリが。無害とはいえ気持ちが悪かったので、電話でボーイを呼び、たも網で外に放り出してもらって一件落着。熱帯雨林に居ることを実感する。

夕方、湖畔を歩いて、現地の土産物店に行き、1.5mほどの滝の全景写真を購入。我が家の狭い部屋には不似合いながら、今でも飾って楽しんでいる。帰途、熱帯特有で急激に暗くなり、星明りと携帯電話の明かりを頼りに恐々歩いていると、砂利道を無灯火自転車を通る人があって吃驚する。現地の人は、視力4.0位が普通で、良く見えているのだという。そういえば、カナイマ周辺には、鉄条網の柵が廻らされており、立

入禁止である。未開現地の人達への疾病蔓延を予防するためという。

4. カラオ川遡行, エンジェルフォール全景展望

翌朝旅行団一行10名で平底の皮船に乗り込み、室外エンジンと手漕ぎでカラオ川を遡行。滝があると全員で船を抱えて担ぎ上げながら、川中島のオルケディアでバーベキュー昼食。更に支流のチュルン川を遡行し、デビル峡谷の展望所から、エンジェルフォールの全景を眺める。さすがに下迫力である。979mを落下すると、水流は全部霧になるので、滝つぼは存在しない。滝の直下は崩れた岩石が積もっているだけで、その上に霧状の水滴が、風になびいて降り注いでいる。落下口もいくつかあり、雨季には水量が増えて、あちこちに落下口が出来るのだという。飽かずに眺めていてもきりがないので、引き返しにかかり、途中で、ひと泳ぎ。川の中には、魚も泳いでいて、水質は無害なことは分ったが、見通しは悪い。後で現地ガイドから下流には、鱐も生息していると聞いて、危ない危ない。

翌朝、カフェテラスで、極彩色の野生のインコがお相伴？してくれる中で朝食後、カナイマ空港へ。空港と言っても、草屋根の壁もない小屋に、腰掛け代わりの丸太が転がしてある建物が一つだけ。電灯も、電話もない。ジャングルを切り開いて、堤防状の滑走路に、吹き流しの旗があるだけ。帰り便は、到着便の復路に乗る方式なので定員があり、旅行団とガイドは先発。



エンジェルフォール全景

少し英会話が出来るといので、家内と二人取り残されて、待機。1時間ほどして、英国の旅行団が到着、ほどなくして、10人乗りほどのセスナ機が着陸したので、先着順ということで、副操縦士席に乗機、展望抜群。眼下にエンジェルフォールを見下ろしながら離陸。緑の絨毯が果てしなく続くギアナ高地のジャングルを後に、一路カラカスへ。緑の魔境ギアナ高地とエンジェルフォールを堪能した旅を終わった。

❖ おわりに

3年9回にわたりお届けした旅の駄文に、お付き合いを頂き感謝します。はじめにお断りさせて頂いた通り、学会誌の「筆休め」となるよう肩ひじを張らない話題として、世界七大陸を、文字通り点々として訪れた旅行記をお届けさせて頂きました。実は、筆休めのほかに、海外旅行の楽しさを通じて、海外との交流、体験の大切さをお伝えしたかったのですが、くみ取って頂けたでしょうか。

地勢的に島国に住む我々日本人は、陸続きの大陸国の人たちとは違って、自戒を含めて井の中の蛙になりがちです。明治維新期に倣うまでもなく、外国との交流体験は、自然環境・気候風土の違いを認識するのはもちろん、文化であれ、歴史であれ、その相違に触発されることによって、大きなチャンスを生み出すものと信じています。我々技術に関わる者も、海外交流を体験することにより、思わぬヒントを得ることも多いはずです。

DXが進展し、インターネットで手軽に知見は得られても、体験に勝るものは無いと思います。

コロナ禍もあり、若者の海外留学が減り、海外交流が少なくなっていることを危惧しています。駄文が、そのような風潮に、いくらかでも竿をさすことになったとすれば、望外の喜びです。

世界は広いもので、極寒のアラスカで体験したオーロラの神秘旅、世界の屋根エベレストをはじめとするネパールの旅、仏陀遺跡をはじめとするインドの世界遺産の旅、南米ペルーのナスカの地上絵・マチュピチュ等のインカ文明を巡る旅、世界一のお祭りと言われるリオのカーニバル、タイ、マレーシア、ヴェトナムなど東南アジアの旅、中国奥地の桃源郷九寨溝、黄龍への旅、最近隣の台湾、韓国への旅等々、機会があれば、又、ご報告させていただきます。